

小説部門の課題文、古井由吉「辻」は、ミュージルやブロッホの翻訳者でもあった古井が、屈折した、重層的な文体でもって、「家」や「父・息子の対立」という伝統的モチーフを、外界と内界とが錯綜する精神のドラマとして仕立て上げた作品。主語や人称代名詞の用法・設定、時制や時間構成などの一ひねりも二ひねりもした凝った意匠を、込み入った、変幻自在の長いセンテンスを、いかに首尾良く訳出しようかが問われる。一方、評論・エッセイ部門の小沼丹「梨の花」ほかは、平明な語り口ながら、その微妙な、とぼけた味わいを異言語に移し替えるにはそれなりの困難が伴う。ただ説明しすぎると妙味が失われてしまうし、と云って、説明を加えないとわからないところもしかとある。そのさじ加減が難しい。それぞれの小品の核に据えられた固有名詞の持つコノテーションを、いかに読み取り、どこまで訳出するかも問題となる。予備審査を通過した訳稿は力作揃いであったが、優劣を選別する機能も果たすという点では、この古井、小沼の組み合わせは、きわめて有効に機能したようだ。

満場一致で最優秀賞に選ばれたカトリーナ・アンダーソン氏の訳文は、今後この賞を目指す方々にとって一つの規範となるような、過不足のない出来栄であった。原文とのつかず離れずの距離感、バランス感覚に優れていて、訳文のリズムや流れもよい。課題文2つのスタイルがしっかり訳し分けられているところも評価できる。ただし、小沼の原文の飄逸としたユーモアの再現という点では、いささか不満も残った。優秀賞に選ばれたジョアンナ・デアー氏は、原文はよく読めていたし、訳者の力量を随所に感じさせる訳文であったが、ときに原文のセンテンスの順序を入れ替えたりして、過剰に説明的に翻訳してしまう傾向があり、古井「辻」原文の視点転換の妙や、小沼の俳味が見失われがちになるのが気になった。同じく優秀賞のリチャード・ラッツ氏は、かみ砕き方のうまい翻訳で、常に原意の明快でわかりやすい見取り図を提示しようとする姿勢は評価に値する。原文の意味の膨らませ方や、原文の描出話法の直接話法化、段落の切り分け方の変更などが、恣意的でありすぎるのが惜しまれる。

井上 健